

私の昭和

香川芳子

女子栄養大学学長



「女学生も軍需工場の働き手でした。空襲で東京が焼け、2回も転校しました。疎開先、前橋の学校で授業は1日だけ。あとは教室で武器の部品みがきでした。こんな時代はけっしてくり返してはなりません」

写真提供／朝日新聞社
『アサヒグラフ』昭和20年
7月15日号の表紙から

多感な女学校時代は 勤労働員で過ぎていきました

多感な娘時代は戦争の真つただ中でした。昭和19年、戦局は悪化の一途、翌年、政府は学徒勤労働員の通年実施を決定。私は高等女学校2年生で東京第一陸軍造兵廠（北区十条）に先生とともに通いました。和紙をこんにやくのりで軟化して貼り合わせ、直径10m

以上の巨大な風船を造る作業です。水素ガスを詰めて焼夷弾を積み、偏西風にのせて太平洋上を飛ばして落下、アメリカ本土を直接攻撃しようという風船爆弾の計画です。作業中に空襲警報が鳴ります。今の人には信じられないと思いますが、造兵廠の林の中に一人ずつ名前が書かれたたこつぼのような防空壕がありました。そのままお

墓になると思いました。私は警報が鳴るとさっと本をとってその防空壕に逃げ込み、静かになるまで本の世界に入り込んでいました。日本全体がそんな時代ですからつらいという気持ちはありませんでしたが、女学校に行っても学習の機会もなかった世代です。

昭和20年4月の空襲で東京の家や学園が焼け、疎開先の浦和や前橋の女学校へと転校しますが、ここでも軍需工場になった校舎で武器の部品をみがく毎日でした。前橋では方言がわからず苦労しました。7月には疎開先で父が亡くなり、終戦10日前に女学校も空襲で全焼。失うものが大きく、精いっぱい生きるしかない時代でした。